
とある継接の欠陥製品

間宮 愁死

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある継接の欠陥製品

【Nコード】

N4616S

【作者名】

間宮 愁死

【あらすじ】

これは行き詰った多重能力者育成計画でアプローチの仕方を変えて行った計画で偶然にも出来た成功作品でもあり、失敗作品でもあるモルモットが巨大な闇に復讐していく物語である。

プロローグ

いつからかわからないが学園都市ではこんな噂が囁かれる様になった。

けして『鬼』を怒らせるな。怒らせてしまった者は
2. 回殺されるだろう。

しかしこんな噂が流れることは本来ありえないことだった。

オカルトな存在などは認められるはずがない

だって、此処は人工的に超能力者を作ることが出来る、科学が発達

した学園都市なのだから……

この二重殺人鬼と脱ぎ女が出会った時、物語は加速する

プロローグ（後書き）

初めて書くのですごく緊張します。間違っていたりしたら指摘よろしく願います。でも作者は打たれ弱いので甘めに頼みます。

能力測定

『ピッ、ピー』と電子音がし、続いて測定結果が表示される。

朝日アサヒ 夜光ヤコウ 測定結果 レベル0 >

そう機械に判断された少年は落ち込んだ様子も見せずにあるがままたにその結果を受け入れたような表情で会場から出て行く。

その少年の容姿は一般の男子と比べるとやや低い165cmぐらいの身長で体の線が細く、染めたことの無い黒い髪を無造作に伸ばしている。

まっ、ぶつちやけるとばつと見女の子な男の子ということである。

その少年が会場から出て廊下を歩いていると後ろから黒髪ツンツンヘアの口癖が「不幸だ」の少年と、金髪グラサンの語尾が「にやー」の少年と、青髪ピアスの変態 いや違った『超変態』の色毛の3人衆が会話しながら近づいてくる。

「あ、朝日ちゃん。発見〜!!!」

青髪ピアスが前を歩く朝日に気づいたらしく大声で叫ぶ。

「はあ〜。朝日ちゃんはやめてくれないかな？ 毎回言ってるよね。僕だって男なんだよ。ちゃんづけはちょっと受け入れられないよ。」

その叫び声を聞いた朝日はため息をつき、疲れたような作り笑顔で

答える。

「大丈夫や。朝日ちゃんは可愛いから制服やないと男と思えへんつて。」

しかし、青髪ピアスはまた朝日ちゃんと呼び、更に可愛いとも言っ

それを聞いた朝日は満面の笑顔で最終確認を行う。

「それは僕をけなしているのかな？ それとも褒めてるのかな？」

笑顔で聞いている朝日の顔には青筋が浮かんでいた。

しかし、青髪ピアスはそんなことには気付かず、さらりと答える。

「そんなん、褒めてるに決まってるやん。」

ボクはショッタってか、男の娘もいけるんや。」

青髪ピアスがそう言った瞬間、『パチン』と言う音があたりに響く。

そして朝日は青髪に近づき、周りには聞こえないように青髪ピアスの耳元で囁く。

「おい、今のは冗談だよな。今、謝るんだったら許してやる。」

「す、すすす、すみませんでしたー！！」

青髪ピアスは惚れ惚れするぐらいのスピードと姿勢で謝った。

その姿勢とは地面に対して平行　　90°。ピッタリ頭を下げる姿勢だった。

また『パチン』と言う音があたりに響く。

「今度からは気をつけてよね。」

朝日は青髪ピアスのそばから離れて言う。

「……………アーちん、何したんだにゃー？」

「さ、さあ、わからねえ。ただこのことについては触れないほうがいいのは確かだ。」

金髪グラサンの少年　土御門元春の口から漏れたふとした疑問に、
黒髪ツンツンヘアの少年　上条当麻がシリアスな口調で答える。

「あ、もしかして聞こえた？」

上条は朝日の問いかけにビクッと反応する。

その反応を肯定と取った朝日はそのまま確認をする。

「バラしたら……………わかるよね？」

その確認がさっきの言葉を聞いていた上条には素晴らしく怖いものを感じられた。

そしてその心の叫びが口から吐き出される。

「ふ、不幸だー!!」

状況のわかっていない土御門はきょとんとしているが、そんなバカデルタフォースを横目に朝日は教室に戻る。

(おい、朝日。いつも言ってるだろ。急に変わるのはやめてくれって。)

(ごめん、夜行。つい怒りが爆発しそうになっちゃって。)

(ったく。そういうことかよ。朝日も難儀だよな。)

(そういう君もでしょ。)

(クッククック、そりゃ違ういな。)

(あははは……)

(ハハハハ……)

能力測定（後書き）

此処までも謎が沢山なんですけどこんな感じで進んでいくんですよ。詳しく願います。

上条たちとの関係はいまのところはクラスメイトというところですよ。どのぐらいまでがレベル0なのかが分からない。土御門は肉体再生のレベル0だけど少し再生してるしな。発火能力だったら煙草に火をつけられるぐらいの火の粉を起こせるってのはレベル1なのか？レベル0なのか？

魔術師との邂逅

能力測定から少し時間が過ぎ、夏休み目前の7月19日の夜。

この日、朝日はなぜか胸の奥がざわめき、家に帰らず街の徘徊をしていた。

まあ、家と言っても都市伝説の二重殺人鬼が出るとされている地域にある廃ビルを無断拝借しているだけなのだが……

おっと話が逸れた。

つてなわけで気の赴くままに街を歩き回っていた朝日の目の前に赤髪で目元にバーコードの刺青が入っていてくわえ煙草をしている見るからに不良な神父とジーンズの片方を太腿の際どい所まで切断させて露出させ、Tシャツの片方の裾も根元まで切断している女性が現れた。

その人物を眼に入れた瞬間、朝日の本能がこいつだと叫ぶ。

そして現れた人物の内の一人与朝日の二人は声を揃えて言った。

「あなたですね。僕（私）の胸騒ぎの原因は。」

この街に来てから神裂は胸騒ぎがしていた。

任務であるインデックスの保護があるためなるべく意識しないようにしていたが、ふとした瞬間には胸騒ぎについて考えていた。

そのため任務に身が入って無く同僚のスタイルにも「すっかりしろ。今回は僕たちの大切なインデックスを保護するんだぞ。」こう言われていた。
だから

(終わってから探してスッキリさせよう。)

こう心に決めた直後だった。

彼が現れたのは。

目の前に現れた闇よりも深い黒色の髪を無造作に伸ばし、華奢な体つきで男性用の制服を纏った女性のような男の子を見た瞬間。

神裂は口から言葉が漏れてしまう。

「あなたですね。私の胸騒ぎの原因は。」

口から言葉が漏れてしまった以上そのまま立ち去る事は出来ない。

そのため意を決し、口を開く。

「私はイギリス清教内第零聖堂区『ネセサリウス必要悪の教会』所属の魔術師、

神裂火織カンザキカオリです。あなたは何者ですか？」

「何者って言われても……僕の名前は朝日夜行だけど……
……第一、まじゅつし？って何なの？」

何者かと聞かれてきよとんとし、本当に困ったように聞き返す朝日。

（なツツ！！ 魔術師を知らない？？ ということは魔術のマ
の字も知らないものがステイルのルーンを抜けてきた！？）

神裂はステイルのルーンを抜けてきた朝日が魔術について知らない
ことに驚愕する。

そして本当に知らないのか再度確認をする。

「……では、あなたは魔術師ではないのですね？」

「だから、まじゅつし？ってのが何か分からないから『絶対に違う』
とは言えないけど『多分違う』と思うよ。」

「魔術師とは魔術を扱う者のことです。例えば……ステイ
ルお願いします。」

神裂は魔術師について説明しようとするが自身の天草式は分かりづ
らいのでステイルに頼む。

「ハアー 仕方ないな 炎よ」
Kenaz

「う……ん……発火能力じゃ……ない!？」
バイロキネシス

スティルが出した炎を見て、朝日は自身がパイロキネシスト発火能力者なため超能力と魔術の違いに気付く。

「そう言う事です。お分かり頂けましたか？　これが魔術です。・・・それであなはこちら側に関わりますか？」

朝日が魔術について理解できたようなので、神裂は間をおいて問いかける。

勿論、いつでも『抜刀』できるように刀に手をかけるのを忘れずに。しかし朝日はこんな極限の中でも迷わず、あっさりと答えを返す。

「いや、関わらないよ。僕たちはただ生きていられればいいから、そっちが邪魔してこない限り関与しないよ。」

「そうですか。それでは。」

「じゃあ。」

そう言って双方道を別れて進んで行く。

(ふう、胸騒ぎの原因も解決したし、それに話し合いだけで終わってよかったよ。)

(・・・・・・・・・・)

(おーい、夜行。聞いてる?)

(・・・あの刀、どっかで聞いたことあるような気がするんだよな。)

(はぁー、聞いてないよね。・・・で、あの刀って神裂さんって人が持ってたヤツ?)

(ああ、人の背丈ほどの太刀・・・)

(・・・ああ!! もしかして、七天七刀じゃない!? 師匠が言ってた最高傑作の1つ!!)

(たしか・・・抜群の切れ味と長さを誇る七天七刀。圧倒的手数を持つアスカロン。一撃必殺が信条の星砕。半永久的な耐久性と硬さの無銘。等々・・・だったか。)

(そう! それ!)

(ってことは、さっきの約束破らなきゃいけないときが来るかもな。)

(そのときは誠心誠意、謝るってことで。)

魔術師との邂逅（後書き）

今回オリ設定として七天七刀とアスカロンの製作者を一緒にしました。でも製作者はただの刀鍛冶なんです。

あとオリ武器は星砕がガンブレイドで無銘が義手です。

次はインデックスとばして、ディープブラッドか、マルチスキルです。

多才能力？

7月24日

自称魔術師の連中たちとの邂逅が終わり、朝日は無事平穏な夏休みが始まったと思っていた。

しかし、世間は物騒なもので、グラビトン虚空爆破事件なんかが起こっているらしい。

らしいというのは、まあ、貧乏で住んでいるところにはテレビとかラジオなんて高級品は置いてないからである。

それでも噂というやつは街を歩けば自然と興味深い話が耳に入ってくる。

例えば、イマジンプレーカー幻想殺し、レベルアップ脱ぎ女、レベルアップ幻想御手、二重殺人鬼、虚数学区、五行機関などである。

まあ、基本的には実証の無い、都市伝説の類なのだが。

それは置いて、今一番注目されているのは連続虚空爆破事件である。

一応解決されたという情報は流れているが、事件現場の情報と、犯人の情報に齟齬が生じているためレベルアップ幻想籠手というものの使用者なのではと一部では噂されている。

ここまで長々と語ってきたが、朝日達は連続爆破事件に関しては「巻き込まれたら面倒だな」程度にしか思わず、幻想御手に至っては

「そんなもんどうでもいいわ」という感じに聞き流していた。

そして今日もふらふらと街を歩く。

気の赴くままに。

なんとなく裏路地に入り、野良猫を見つけて後をつけたりしながらふらふらと。

目的もなくただ動く。

そして着いた廃ビルの屋上にはいい風が吹いていた。

服が汚れることなど気にせず物陰で横になり昼寝の準備をする。

しかし大通りの方がうるさくなり、寝られない。

そこでのそのそと起き上がり、大通りの見える淵にまで行き見下げる。

そこには慌ただしく準備をする警備員アンチスキルがいた。

どうやらどこかの支部から応援要請が来たらしく、隊員の一人が無線機を使って向こうの状態を聞いていた。

無線機から漏れたある単語を聞いた瞬間、朝日の表情が変わった。

突然立ち上がり、高い所へ登る。

そしてあたりを見渡し、駆け出す。

(何が有ったんだ、朝日。……おい、聞いているのか?)

(……………)

(チツ、クソが。……完璧に『暴走モード』に入つてやがる。)

朝日は二重人格である夜行の問いかけに反応もせず、ただひたすら行動する。

それも普通の人間じゃありえない速度で。

学園都市でたった七人しかいない超能力者レベル5の一人、常盤台の超電磁砲ガン 御坂美琴は幻想御手の犯人確保の現場である第七学区の高架道路に向かっている途中であつた。

現場に近づいているため発砲音や爆発音などが大きくなってきているのを感じながら、御坂は後輩で風紀委員である白井黒子から携帯で犯人についての情報を受け取る。

その情報とは「今の犯人 木山春美は実現不可能と言われた幻の存在、多重能力者デュアルスキルである」というものだった。

電子ロックを電気で破壊し現場に着いた時、御坂の目に警備員が全滅している光景が飛び込んでくる。

その光景を見たときは信じられなかった。

そのため言葉が漏れてしまう。

「嘘、アンチスキル警備員が全滅……」

驚愕し硬直してしまっただが、青いランボルギーニの助手席にいるぐったりしている初春を見て硬直が解ける。

駆け寄り御坂は窓をたたき、声を掛ける。

「初春さん！　しっかりして！」

「安心しろ。戦闘の余波で気を失っているだけだ。命に別状はない。」

突然後ろから声が聞こえる。

そして御坂は声がした方を向く。

戦闘で巻き上がっていた砂塵が風で流される。

するとそこには充血した右目に目の下に寝ても取れそうもないもの凄く濃いクマのある白衣を羽織った女性が立っていた。

そしてその女性　木山春美は御坂と目を合わせ挑発する。

「君に一万の脳を統べる私を止められるかな？」

「止められるかな？ですつて。当たり前でしょ！」

御坂は挑発に乗り、木山に向かって駆け出す。

しかし、足元が消えたり、爆発したりしてなかなか木山に近づけない。

だが、久しぶりの手ごたえのある相手に御坂は笑みを浮かべ言い放つ。

「驚いたわ。本当にいくつも能力が使えるのね。多重能力だなんて楽しませてくれるじゃない。」

「私の能力は理論上不可能とされるアレとは方式が違う。言わば多^マルチスキル^ル才能だ。」

そう言い返して、木山は風の刃を放つ。

御坂は木山の放った攻撃を避け、電撃の槍を速攻で放つ。

しかし、その攻撃は木山のほかの能力で阻まれ届かない。

「なッ！！」

その結果に驚き声が漏れる。

「どうした。複数の能力を同時に使えないと踏んでいたのかね？」

その声を聞き木山は凶星をつく。

そして、自分を巻き込みながら広範囲に能力を使い足場である高架道路を破壊する。

高架道路を破壊したことにより、御坂と木山は自由落下を開始する。

しかし木山は念動能力サイコキネシスで自身と破片を操り、難なく着地する。

一方、御坂は近くにある高架道路の柱に電磁力で引っつく。

（なんてヤツ。自分を巻き込むのもお構い無しに能力を振るってくる！）

同時に能力が使えるからと言って自分を巻き込みながら能力で力押しして、御坂は恐怖を感じる。

そして、距離が開き戦闘が止まる。

多才能力？（前書き）

主人公に設定などは出来ているんですが皆さんに楽しんでもらえるようにと考えると伏線がうまくいっているか不安で筆が止まってしまうorz

多才能力 ？

沈黙が続き木山と御坂がにらみ合っていると上の高架道路から影が木山に向かって襲い掛かる。

それに気付いた木山は空気の塊を飛ばし迎撃する。

見えない空気の塊に迎撃されたその影は木山から離れた地点に落ちる。

落ちたことよって行動が止まり、その影の正体が明らかになる。

その影の正体は人間だった。

それも濡れた鳥の羽のような艶のある黒い髪を無造作に伸ばした線の細い少年だった。

そして彼は壊れた機械のようにゆっくりと立ち上がる。

立ち上がった彼の体は地面に叩きつけられたせいか左肩が外れていた。

しかしそのまま木山に向かってゆらり、ゆらり、と幽鬼のように歩き出す。

その様子を見ながら木山は考える。

(何者だ。この少年は?)

彼の顔は髪の毛と下を向いているため良くは見えないが口が動いている。

離れているため聞こえないが何かを呟いているようだ。

「……デュアル……スキル……クロス……クロス……クロス……クロス……クロス……クロス……」

ボソボソと呟いていたが急に顔を上げ大声を上げる。

「クロス!!!」

それは大量の憎悪と殺意を込められた怨嗟の声だった。

叫んだ彼は木山に向かって一直線に駆け出す。

防御として木山はその行動に反応して大量の礫を念動能力で浮かせ放つ。

しかし彼は躊躇う事無く飛んでくる礫の嵐に踏み込む。

礫、一つ一つ、当たり所が悪かったら即死級の威力がある中を『ノーガード』で。

何発も体に当てながらも礫の嵐を抜け自身の射程範囲に木山を捕らえる。

体を限界まで弓のように引く。

「ガアアアアアアツツ!!」

声にならない叫び声を上げ、体重と駆けていた勢いを乗せて右拳を木山の『心臓』へ突き出す。

木山は近場にある大きな瓦礫で盾を作り防ごうとする。

瓦礫の盾と拳がぶつかる。

『甲高い音』が響き、ぶつかった衝撃によって砂が舞う。

(ツツ!!)

その瞬間、表情には出ないが、木山の心を驚きのみが支配する。

時間が経ち砂煙が落ち着く。

そこには瓦礫の盾を貫いて木山の頬に一筋の傷を作っている少年の姿があった。

「……………なるほど。君のその手は義手なのか。」

木山の呟いた言葉の通り瓦礫の盾から出ている彼の腕は金属で出来ていた。

すると突然、その手が開き獲物を捕らえようとする獣のように動き出す。

それを見て木山は冷静に大きく一歩下がり、いくら手を伸ばしても

届かない位置に移動する。

「やれやれ、君はまるで理性の無い獣だな。だからここで大人しくしておけ。」

そう言つて木山はスタンガン程度の電撃で彼の意識を奪つた。

そして御坂の方を向く。

「ふう、少し邪魔が入つたが続きをしようか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

(・・・・・・・・何、あいつ達！！ ホントに人間なの！？)

御坂は先ほどまでの戦いを見て恐怖を覚えた。

殺すことに躊躇いを持っていないことに

相手を殺すためなら平然と自分の肉を断つことに

「どうした。攻撃してこないのか？ ・・・・・・・・レベル5とはこんなものか。拍子抜けだな。」

話しかけても反応がないため、木山は戦意喪失とみなして呆れて言葉が漏れてしまう。

その仕草が御坂の癪に障る。

「……………電撃を攻略したぐらいで勝ったと思うな!!」

そして御坂は怒りを爆発させ、電磁力で鉄の含まれている瓦礫を掴み、投げつける。

しかしその瓦礫は木山が作り出した炎の剣で叩き落とされ、反撃として御坂の引っ付いている場所ごと地面に落とされる。

そして、今まで、挑発すれば挑発にのり、命を掛けた戦いでないため赤子の手をひねるような戦いになってしまったので木山の良心が痛み、本音を語り出してしまふ。

「……………もう止めにしないか？ 私はある事柄について調べただけなんだ。それが終われば全員解放する。誰も犠牲にはしない。」

「ふざけんじやないわよ!! 誰も犠牲にしない？ アレだけの人間を巻き込んでおいて、人の心を弄んで置いて！ そんなもの見過ごせるわけないでしょうが!!」

「……………やれやれ、レベル5とは言え所詮は世間知らずのお嬢様か。」

その言葉に御坂はムツとする。

しかし、木山は自分のペースで話し続ける。

「君たちが日常的に受けている能力開発、あれが安全で人道的なも

のだとでも思っているのか？」

その言葉を聞き、御坂の眉がピクリと動く。

それを確認した木山は言葉を続ける。

「学園都市の上層部は能力に関する重大な何かを隠している。それを知らずにこの街の教師たちは学生の脳を日々開発しているんだ。」

ちらりと一瞬だけ木山は少年に眼を向ける。そして占めくくくる。

「……それがどんなに危険なことか分かるだろ？」

「なかなか面白そうな話じゃない。……あんたを捕まえた後でゆっくり調べさせてもらおうわ!!」

そう言うと御坂は電磁力で砂鉄を集め、砂鉄を固めて先を細長く形成し木山に放った。

それを先ほどの反省を生かし、木山は大きめの瓦礫で守る。

「残念だがな。まだ捕まるわけには行かない。」

そして空き缶の入ったごみ箱を空中に放り投げる。

放り投げられたためゴミ箱に入っていた空き缶は無造作にばら撒かれる。

「ッ!! 空き缶!! 虚空爆破!!」

ばら撒かれた空き缶によって御坂は一つの可能性に気づく。

そして、木山は問いかける。

「……………さあ、どうする？」

一瞬の判断ミスが死を呼ぶような状況の中、御坂は冷静に考え、

（避けきれない。……なら！！）

「全部、ふっ飛ばす！！」

全力全開で電撃を放ち周りの空き缶をすべて破壊する。

「凄いな。だが……………」

（切り札は最後まで取っておくものだよ。）

木山は御坂の全力全開の電撃を見てそう感想を漏らす。

そして手元に残しておいた一つの空き缶を御坂の死角である背後に
テレポートさせる。

「どっ？　ざっとこんなもんよ。」

御坂が得意げにそう言い切った直後、木山がテレポートさせた空き
缶が爆発する。

「もっと手こずるかと思ったが、こんなものか……………レベル
5。恨んでもらって構わんよ。」

そう言うと木山は踵を返して歩き出す。

そこで、さっき倒した少年を見つける。

足を止め木山は先ほどまでの事を思い出し考え、呟く。

「……………ふむ、あの少年は興味深いな。」

そして、その少年を担ぎあげ再び歩き出す。

しかし、その歩みは止められる。

「捕まゝえた」

そう、御坂だ。

御坂はそう言いながら木山に抱きついた。

「バカな!!」

御坂が動けることに木山は取り乱すが、先ほどまで御坂がいた位置に眼を向けその理由が分かる。

「ッ!! 磁力で即席の盾を組み上げたのか！」

「そ。そしてゼロ距離からの電撃。『あの馬鹿には効かなかったけどいくらなんでもあんなトンデモ能力』までは持ってないわよね。」

そう確認の様に御坂が言葉を発すると木山は逃げようとして電磁力

多才能力 ？

「……………う、ん……………」

御坂達の戦いの余波で初春は目を覚ます。

そしていつもの様に手を動かして伸びをしてから今までの現状を思
い出す。

（確か私は木山教授の研究所に行つて、そこで幻想御手レベルアップに関する
重大な秘密を知つて、それが木山教授にバレて人質にされた。
そしてなぜか幻想御手レベルアップの治療プログラムを渡されて、そこから警備
員キルに包囲されたんだ。
そこから記憶がないからそこからたぶん気絶してたんだ。）

思い出し終わりそこで少し引つかかるところが出てくる。

（……………あれ？ 何かおかしいな？）

回りを確認していくと自分に着けられていた手錠が外れていること
に気づく。

（あッ！ 外れてる！ ……でも、どうして？ そんなこと
より早く出ないと！）

そして車から降りた初春は絶句する。

ーレットを強要される記憶。

・実験が失敗し、画面にエラーが表示され警告音が鳴り響く記憶。

・指を一本ずつ折られ、拷問され続ける記憶。

等々。

様々な記憶が脳に入ってきて御坂は混乱する。

「い、今は………?」

そのため、こう呟き、抱きかかえていた木山と少年を地面に落してしまふ。

その衝撃で木山と謎の少年は目覚める。

「ッ、見られた、のか。」

「チッ、クソ!!」

御坂はさっきまで木山と謎の少年の記憶を見ていて思った疑問を口に出す。

「な、なんで、なんであんな事?」

その疑問に、木山と謎の少年は間髪いれず嘲笑し、同時に答える。

「フッ。あれは表向き、AIM拡散力場を制御するための実験とされていた。が、実際は暴走能力の法則解析用誘爆実験だ。AIM拡

散力場を刺激して暴走の条件を知るのが本当の目的だったというわけさ。

もっとも暴走が意図的に仕組まれていた事を知ったのは後になってからだっただがね。」

「ハッ。あれは多重能力者デュアルスキルを作るための実験だ。能力者は1人格に1つしか能力が使えないことを前提条件として、多重人格者を作り出し、その人格1人1人にバラバラな能力育成を行う実験計画の事さ。

なあ、知ってるか？ 多重人格つてのは子どもの頃に過度のストレスを与え続けたら簡単に出来るんだぜ。」

二人同時に話したので聞き取れないところもあったが、御坂はあることに思い当たる。

「人体、………実験。」

「そうだ。あの子たちは今なお眠り続けている。私達が使いつけてのモルモットにしたんだ。」

「そうだ。俺達、置き去りチャイルドエラーは使い捨てのモルモットさ。アイツ達に言わせると、一度捨てられたものを再利用しているだけなんだとよ。」

木山と少年は肯定し、淡々と話す。

「そんなことがあったんなら、警備員アンチスキルに通報しよ。」

御坂は正論を言おうとするが、短い言葉で遮られる。

「23回。」

「666番。」

それから二人はそれぞれその数字について説明し出す。

「私が樹形図ツリーダイヤグラムの設計者の使用申請をした回数だ。だが、すべて却下された。統括理事会がグルなんだ。アンチスキルが動くはずがない。」

「俺らに付けられた番号だ。このことから少なくとも665人はこの実験の犠牲になったことはわかる。この街ではこんな大掛かりな実験まで黙認されているんだ。信じられるわけがない。」

それでも、御坂は食らいつこうとする。

「だからって、こんなやり方。」

しかし、二人は切って捨てる。

「君に（お前に）何が分かる！！！！」

この言葉には様々な思いが込められている気がした。

そして今までの事を無駄にしないために、心に刻みつけるために、勇気を出すために、自分の弱さを隠すために、彼らは叫ぶ、吠える。

「あの子たち救うためだったら私はなんだってする！！ この街のすべてを敵に回してもやめるわけにはいかないんだ！！」

「この実験に参加した奴らに復讐し終えるまで止められるわけには
いかないんだ！！ たとえこの街のすべてを敵に回しても！！」

その後、二人は苦しみ、頭を押さえながら倒れる。

すると、そこから胎児の様な奇妙な物体が生まれてくる。

「……………胎児？」

その光景に驚き、御坂から驚きの声が漏れる。

それは……………

化け物だった。

そして生まれたものは衝撃波の伴った大きな産声を上げる。

それを磁力の組み上げた盾でガードし電撃を食らわせる。

すると、胎児の体は電撃を受けて背中がなくなる。

しかし、すぐに再生し、一回り大きくなり背中に2本の腕が出来る。

「は？ 大きくなった。」

そう呟く。

そして胎児の目が動き御坂を見つけ、攻撃をしてきた御坂に大きな
氷柱を数本落とす。

だが、高威力だが大雑把な攻撃のため御坂には当てることが出来ず、距離を取られてしまう。

十分な距離が取れたため反撃に移ろうと御坂が胎児に目をやると、胎児は闇雲に暴れているだけのようだった。

「まるで、何かに苦しんでいるみたい。」

そして此処まで降りてきていた初春が言葉を漏らす。

高架下からわけのわからない化け物が現れ、警備員は動揺する中、アシチスキル体長の長身の女性は声を張る。

「動ける物だけでやるしかないじゃんよ。実弾の許可をする。撃て
!!!」

しかし、化け物は大きくなるだけで効いていないようだった。

多才能力？

そしてアンチスキルが化け物の行動を制限している間に木山と少年は起き上がり嘲笑を始めた。

「フフツ、まさかあんな化け物が生まれるとは。」

「ハツ、確かに俺らじゃ止められねえな。」

「まったくだ。それにあれはもう私の手から離れてしまった。しかし、学会で発表すれば表彰ものだったろうに。惜しい事をしたな。」

「……これで、あの子達を救うことは出来なくなったか。おしまいだな。」

「かもしれないな。俺たちじゃどうしようもねえだろうしよ。」

「そうだな。」

二人の間にあきらめムードが漂う。

そこに何処からともなく現れた初春が言葉を発する。

「諦めないでください。それに木山先生は私の手錠外してくれました。」

「それだけで私を信じるのか？」

「信じます。……子供たちのためなら先生は嘘をつきませ
ん！」

しかし、初春の言葉が事件のときの子供たちと重なり、託してみる
ことにする。

「……あれは、おそらく幻想猛獣だ。」

木山がゆっくり語り始める。

「……そのAIMバーストってなんなの？」

意味のわからない造語に初春の後ろにいた御坂が聞き返す。
それに木山は丁寧に答える。

「……あれは幻想御手のネットワークレベルアップによって束ねられた
一人のAIM拡散力場、それらが触媒と成って生まれた潜在意識
の怪物。

「……言い換えればあれは一人の子供たちの思念の塊だ。
もつとも、そんなものに自我が存在するなんて考えられないがネッ
トワークの核だった私の感情に影響されて暴走しているのかもしれ
ないな。」

「……なんか、かわいそう。」

「うん。」

木山の話聞き初春と御坂は同じような感情を抱いたが、今まで沈
黙していた謎の少年がぼつさり切り捨てる。

「ハッ。それは上位種にしか感じることでできない感情さ。下等種にとつてはそんな感情は感じねえよ。」

そんなことよりどうにかしろよ。上位種。俺たちには止められないんだからな。」

で、どうすれば止まるんだ？」

「AEMバースト 幻想猛獣はレベルアップ 幻想御手のネットワークが生み出した怪物だ。ネットワークを破壊すれば止められるかもしれない。」

「ッ、レベルアップ 幻想御手の治療プログラム！」

「試してみる価値はあるはずだ。」

「だったらやってやろうじゃないか。あがけるだけあがいてやる。俺たちはまだ死ねないんだ。」

そうやって少年は地面に落ちていたアンチスキル 警備員の落とした銃を取り、マガジンを抜き残弾数を確かめる。

（形状はM16アサルトライフル。残弾数はMAX、20発か。）

「初春さんはその治療プログラムを持ってアンチスキル 警備員の所へ！！」

御坂はそうやってAEMバースト 幻想猛獣に攻撃する。

そして少年も行動を開始する。

「おい、花女。俺がアンチスキル 警備員のところまで連れてってやる。しっかり

付いてこい。」

「……、え？」

その言葉を聞いて花女というのが自分のことだとわからなくて初春は呆ける。

そこで少年は指を指し、言葉を発する。

「てめえだよ。早くついてこい。じゃないとあのバケモノを止められなくなつて、向こうにある原子力発電所をぶっ壊されてTHE・ENDだ。」

「ッ、はいッ!!」

理解したために声を張った返事を聞き、少年は駆け出す。

向かってくる腕などをかわしながら冷静に銃で打ち抜き、自分の後ろに確実に安全な空間を作りながら……

1発。

……2発。

……3発。

……4発。

……5発。

(・・・まだ腕は衰えてないみたいだな。しかし今日は調子がいい。思ったところに当てれる。外れる気がしない。最高だ。)

6発、7発、8発、9発、10発。

・・・11発。

残り、9発。

しかし今までは、御坂に集中していた幻想猛獣AEMバーストがなぜか、彼らの方へ攻撃の手を強める。

(ヤバイ!!)

その瞬間、背に氷を当てられたような感覚にとらわれる。

(焦るな。落ち着け。昔も感じたことがあるだろう。考える。)

そして幻想猛獣AEMバーストが多数の腕を伸ばし能力の飽和攻撃を行ってくる。

(ちツ、使いたくなかったがやるしかねえか・・・)

「おい、此処を上つたら警備員アンチスキルの車が見えるはずだ。行け!!」

そう言って、少年は巻き込まないように初春から距離をとり、銃をフルオートにし1発を残すように残りをばら撒くように放つ。

そして切り札ジョーカーを切る。

懐から銀色の『握りこめるぐらいの物』を取り出す。

そのまま『それ』を相手に向かって投げつける。

そして『それ』を銃で打ち抜く。

『それ』は……………」

……………」『大爆発』を起こす。

轟音とともに辺り一面を破壊し、大きなクレーターを作り上げる。

それを間近で見っていた御坂は驚愕する。

しかし、どれだけ破壊されても幻想猛獣^{AEMバースト}は再生し、より大きくなる。

「ッ、ちィ。」

それを見て御坂は忌々しく舌打ちする。

（どれだけ破壊してもキリがないじゃない。それに、さっきのから想像するに多分、跡形もなく吹き飛ばしても再生するわね。厄介ね。こんな状態が続くんじゃ、体力が持たない!!）

一方で謎の少年と分かれた初春は非常階段を何度もこけそうになりながらも必死に登り、警備員^{アンチスキル}の車両に向かって行く。

（御坂さんだつて、知らない人だつて、頑張ってるんだ。私も頑張らないと。……あと少し、あと少しだから頑張れ、私のプログラムで佐天さん達を助けるんだ。」

そう自分に言い聞かせ呟きながら、右手に持ったデータチップを大事に抱え、初春は力を振り絞る。

そして車両に到着し、思いっきり叫ぶ。

「すみません！！ジャッジメント 風紀委員です！！ 誰か話を聞いてください！

！ お願いです！！ 話を聞いてください！！ もしかするとあの化け物を止めて、さらに幻想御手レベルアップの使用者の意識を戻せるかもしれないんです！！

だから！
だから！！

話を聞いてください！！」

その声に反応したのか、今まで攻撃しようとしていなかった初春AIMバーストに幻想猛獣は攻撃を放つ。

それは雷撃で初春ではとても避けられない。

（あと少しなのに。避けれない。避けれない。此处で終わりなの。助けられるかもしれない道具を持っていてそれでも此处までなの。。。）

初春は悔しさを感じながらも諦めかけ、目を瞑る。

多才能力 ？

しかし希望は取り戻される。

炸裂音とともに初春が目を開いてみると、そこには盾を持った二人の女性警備員アンチスキルがいた。

「まったく、最近の若いのは無茶するじゃん。」

「そ、それで、あの化け物を止めて、意識不明者を助ける方法が本当にあるの？」

長髪を一纏めにした、抜群のプロポーションを持つ女性は愚痴り、もう一人の眼鏡をかけた癖毛の女性はおどした言葉使いでさっきの言葉の確認をする。

それに対し初春は握っていた右手を突き出して開きデータチップを見せ、言う。

「はい。この治療プログラムを使えばおそらくいけます。」

データチップと初春の瞳を見た二人は初春を信じてみることにする。

そして行動を開始する。

「そうか。私が全責任取るじゃん。だからそれをどんな方法を用いても使うじゃん。」

おい、誰か、緊急連絡用の無線機持って来るじゃん!!」

「あの、それじゃ。私はパソコンのところへ案内しますね。」

「はい!! ありがとうございます。」

そう言つて、気の弱そうな女性はアンチスキルの車両の後ろドアを開け、中に初春を案内する。

そして車両搭載型のアンチスキル専用のパソコンのところまで案内する。

「……………このパソコンなんだけど、大丈夫??」

普通のパソコンとは違いあらゆる機能がつけられているため普通の人間では初見で更にマニュアルも見ずに使いこなすことは不可能だと思われる。

しかし初春は自信を持って答える。

「はい!! 大丈夫です。いけます。」

(多分、これは外装からはわからないけどOSとして使われているのは汎用性に優れた極小情報研究所製の物だと思う。使ったことではないけど資料は見たし、出来ると思う。)

そして一心不乱にキーボードを叩く。

「……………すいじ。」

その集中力とミスのないタイピングに声が漏れてしまう。

しかしその集中力ゆえにその感想は聞こえずに初春の作業は終わってしまう。

「準備完了しました。後はこれを学園都市中に『流す』だけです。」

『流す』という単語に違和感を感じたため質問をする。

「『流す』って、治療プログラムって『音』なの??」

「はい。^{レベルアップ}幻想籠手自体『共感覚』を利用しているらしいので。」

それについて初春が答えたところで入ってくる。

「それじゃあ。そいつを学園都市中に流すじゃんよ。方法は問わな
いって言ってたじゃん。それに責任は大人に任せとくじゃん。」

「それじゃあ、行きます!」

「おう。やっちゃんじゃん。」

そして初春はその言葉に後押しされ、<Enter>キーを押す。

それは学園都市中に流れる。

リクエスト曲と言っ形で。

一方でレベル以上の能力を使った反動で謎の少年 夜行は脳に反動を受け、脳がかき回されたような感覚を受け胃の中の物を戻す。

「うえエエー！」

(クソツ！ やはり異能力^{レベル2}以上の能力を行使するのは駄目か！)

そんなことを考えながら胃の中の物が無くなるまで吐く。

そして吐ききったころには幻想籠手^{レベルアップ1}の治療プログラムが流れ終わり、静寂を取り戻す。

^{AEMバースト}幻想猛獣との終わりの見えない攻防に御坂は内心舌打ちをする。

(ツチイー！！ やっぱりわかっていた事は言え、さすがに無尽蔵^{バースト}ってのはキツイわね！！)

そして辺りに何かわからないようなそれでいて安心するような音が流れる。

その音を聞いたためか幻想猛獣^{AEMバースト}が苦しみだし、単調な攻撃しかなくなる。

そこで御坂が攻撃を見切つてカウンターで電撃を入れるとさっきまで再生していた腕が再生しなくなる。

そして……

(回復しない!! 　　つてことは、さっきのは!! 　　初春さんがやったのね。だったら、ここで決める!!)

そう思い、手加減なしで全力で電撃を食らわす。

「どうよ。ざっとこんなもんでしょ。」

そして得意げに言い放つが……

「いけない!! 　　幻想猛獣AEMバーストは化け物なんだ!! 　　核を破壊しないと生き残る!!」

木山が助言をするが、ときすでに遅し。

幻想猛獣AEMバーストはまた起き上がり、御坂に触手を伸ばし、動きを封じ込める。

(な!? 　　油断したツ!! 　　核、なによそれ!? 　　この巨体のどこにあるっていうのよ!? 　　……ああ、もうわかんないから全部消し飛ばす!!)

そう決めた御坂は、自分を捕まえている触手を砂鉄の剣で切り落とし、人間相手の全力じゃない、自分自身の出せる全力で電撃を放つ。すると、少し壊れだしている核らしきものが見つかった。

そこからは幻想籠手レベルアップバーを使った人たちの苦しみの声が聞こえてくるようだった。

「こんなところで苦しんでないととと帰んなさい。」

だから御坂は優しくこう声をかけ、自分の代名詞であり、切り札である超電磁砲レールガンを残りの全電力を使い切る勢いで放とうとする。

多才能力？

頭痛からまだ開放されていない夜行がヨロヨロと割って入ろうとする。

「こいつの核を破壊されると困るんだよ!！」

しかし、無常にも御坂の超電磁砲レールガンは放たれ、核は破壊される。

「こいつを使えば、多重能力について何か調べられたかもしれないのに!！」

夜行の叫びは伝わることなく虚空に消えてゆく。

次第に体から力が抜けていき、支えを失った棒のように倒れていく。

「クツ……ソ、ソ、ソ、」

(朝日が起きているか不安だが、賭けるしかねえ。)

夜行は覚悟を決め、朝日が目覚めていることに賭ける。

『パチン』

暴走をした場合朝日が起きている確立は10%しかない。

そのため朝日に変わることはギャンブルで大穴に賭けるようなもの

だった。

倒れ行く身体に切り替わった朝日は運よく起きてはいたが、頭が回らず、まだ夢の中にいる様な状態だった。

そのまま倒れ、受身も取らず地面にぶつかる。

しかし意識はいまだに覚醒してないらしく起き上がらない。

しばらく時間がたちようやく額に痛みを感じるほどに意識が覚醒した朝日は暴走と夜光が酷使した身体に鞭を打ち、ゆっくり起き上がる。

「……………ツ……………!! 痛ったあ。」

起き上がった朝日は手を額にやりながら、暴走後の情報を整理する。

(ええっと、、確か木山とか言う人が多重能力者であるとか言う言葉を聴いて暴走したんだっけ。

……………そして夜光が逃げなかつたってことは木山って人が本^{デュアルスキル}当に多重能力者である、もしくはその情報を持つてる可能性があるって事なのかな。……………ってことは木山って人は逃がしても捕まらしても駄目ってことか。うーん、どうしようか? ……
……………っていつかその人捕まってるない!? ヤッバ。)

「……………これが、超能力者^{レベル5}。。。」

木山が呆然とした表情でつぶやく。

辺りにいた全員がレベル5の強さに呆然としながら化け物を倒した
AEMバースト
と言っことに喜びを感じて浮かれている。

そしてそれを事象をおこした少女を見ると、

ぶっ倒れていた。

文字通り、地に伏しピクリとも動かない。

死んだかと思い木山は恐る恐る尋ねる。

「ど……どうしたんだ？」

「電池切れ……」

倒れ伏したまま御坂は即答し、まじめな質問をしてくる。

「で、どうすんの？ 今の私にはあんたを止める力残ってないけど。」

「……いや、ネットワークを失った今アンチスキルから逃れる術
AEMバースト
を私は持っていないからな。」

木山は横目で幻想猛獣がいなくなったために戻ってくる警備員を確
アンチスキル
認しながら質問に答える。

しかし、捕まると分かっている、決意だけは言葉にしようと木山は思った。

「……だが、あの子達のことを諦めた訳じゃない。もう一度最初からやり直すさ。理論を組み立てることはどこでもできるからな。たとえ刑務所の中だろうと、この世の果てだろうと、私の頭脳はここにあるのだから。……ただし今後も手段を選ぶつもりはない。」

そしてそういつて切り上げ、AEムバースト幻想猛獣が消えたために戻ってきた警備員アシキルに手錠をかけられる。

そんな事件円満解決的な空気の中、朝日は行動する。

後ろから近づき最大電力でレールガンを放ったために電池切れを起こしている御坂に近づき、普段道理話しかける。

「勝ってホッとしてるところに水を差すようで悪いんだけど、」

そして首に腕を回しホールドして、銃をコメカミに突きつけて言う。

「木山先生を此方に渡してくれないかな？」

その後、間を少し空けて声のトーンを低くして夜行を真似て声を発する。

「……………でないと学園の宝である超能力者レヘル5を殺す。」

「ッ、あんたねえ!!」

その『殺す』という言葉に反応した御坂は声を荒げるが、

「どうしたんだい、レベル5。君なら言葉よりも先に手が出ると思
っていたんだが、……まさか能力の限界使用で能力が使え
ないのかい？」

朝日は冷静に凶星を突き、受け流す。

「なに、迷うことはないさ。学園の宝である数少ない超能力者^{レベル5}を助
けるならこれぐらいの取り引きどってことはないだろう？」

メリットとデメリットを考えたまえ、どちらが価値のあるものか。」

しばらく硬直が続くが、

「……ちツ、しゃーないじゃん。此方は其方の要求にこた
える。だから人質を解放しろ。」

長身でプロポーション抜群なアンチスキルが答える。

「先輩！！ そんなことしてもいいんですか！？」

そこで、同行していた眼鏡のアンチスキルから声上がる。

しかし、長身のアンチスキルは反論する。

「ならば、見捨てるというのか！？ それに子供を救うことが私達
の仕事だろう！！ これは私が独断で決めたことだ。お前達は関係
ない。それにさっきの責任も私がとるからな。どってことはない。」

意見を変えられると面倒なので、朝日は素早く次の段階に持って
いく。

「いい判断だ。それでは人質交換を開始しよう。武装をはずして木山を連れて大きく7歩進め。あと、約束が信じられないなら、銃を構えてくれてもかまわない。」

そう言い、虚勢を張る。

「きたじゃんよ。」

「よし、それではこれから1、2、3で人質を交換する。それでは数えるぞ。」

「1。」

「2。」

「3。」

無事に人質交換が終わったためほっとするが、朝日にはまだやるこ
とがある。

それはここから逃げることだ。

そのため人質をとってからは、逃走する方向に背を向け、相手から
7歩以上離れた。

あとは相手の目を眩ませ、反転して逃げるだけだ。

そこで朝日は御坂のコメカミに当てていた銃口を相手に向け引き金
を引く。

すると弾が出ると思ったのか全員が目を瞑る。

それは当然のことだ。

なぜなら、銃口を向けられたら死を覚悟した人間でも目を瞑ってしまふことがある。

それを完璧に防ぐ手段を持たない覚悟も出来ていない普通の人間が向けられたならどうだろう？

絶対に目を瞑ってしまう。

否、目を瞑って現実から目を逸らすしか出来ないだろう。

しかし、発砲音はなく目を開くとそこは発光手榴弾が爆発する瞬間だった。

そして目と耳と言う五感でもっとも頼りにされる器官を封じた朝日は逃げる。

そして逃げ切った朝日は物陰に隠れ、肺に残っている空気を全て吐くように大きく、深く、息をする。

今はいつも纏めてある髪が降りていて顔は見えていないし、名前も名乗っていないので調べられないはずである。

• それに、極秘処理された研究のモルモットだったのだから……

（はっ。 余計なことは考えちゃ駄目だ。余計なことは考えちゃ駄目だ。……よし。万が一のことも考えてばっさり髪でも切ってイメージ変えよう。）

昔のことを思い出すが、無理やりプラス思考に考え、その場を乗り切る。

そして、家である廃ビルに到着した朝日は連れてきた木山を逃げられないために、更に落ち着かせるために空き部屋に閉じ込める。

そして自分の部屋のベットのようなものに倒れこむ。

多才能力？（後書き）

とりあえず多才能力編は自分の中で区切りをつけることが出来ました。

その後については未定です。

なので活動報告を読んで、ご意見を下さるとありがたいです。

自己満足で書いているので厳しい意見はハートをズタズタにするのでお許しを。。。

皆様のご意見心よりお待ちしております。

かしこ。

こんな締め言葉在りましたよね

吸血《鬼》殺し ？

レベルアップ
幻想籠手の使用で倒れた者たちが一斉に起き上がった日からしばらく経ち真相が世間に明かされたが未だにはつきりとしらない所があり、憶測が憶測を呼んで色々噂が立っている状態である中。

顔が隠れる長さで髪をバツツリと一直線に切った独創的な髪型の男が人ごみを縫うように歩く。

「あ、あ、最近付いてないな。不幸ってうつるのか？」

そう呟いて、一人の少年を思い浮かべる。

が、現実逃避をしている暇はない。なぜなら、目の前のコンビニで一心不乱に漫画を読み漁っている常盤台中の制服を着た少女がいたからだ。

その少女というのは幻想籠手の犯人を後一步のところまで追い詰めたものの、犯人を自分に連れ去られてしまった例の彼女、御坂レベル5の超能力者である。

その彼女を視界に入れないようにして恐る恐る歩く。

最小限のことはしているが、背丈やらはそのままなではれないか不安が高まる。

そして気づかれずに通り過ぎることが出来、ホッとするが、つかの間。

銀髪のシスター服を着た小さい少女と青髪ピアスの大男を連れてハンバーガーショップに入っていくついさつき脳裏によぎった少年の後姿が目に入った。

いつもなら関わらずに無視するところだが、最近自分の身に起きた不幸がこいつのせいに思えてきて、ぶん殴ろうと思い、つけてハンバーガーショップに入ろうとする。

が、体の奥底が脈動し、何か悪いモノが目覚めるような悪寒に包まれ、脇に逸れてハンバーガーショップに入らずに通り過ぎることにする。

そして窓の脇を通り過ぎようとしたとき、黒髪の少女と目が合った様な気がした。

此処までで相当不幸が重なったため、気がしたから関わるといふことではもっと不幸が重なると思った彼は無視して、夕食何にしようかなあ。とか考えながらブラブラと歩く。

しかしこの行動が逆に不幸を招くとは知らぬまま・・・

吸血〈鬼〉殺し？（後書き）

ISとネギまも投稿しました。

よろこばせびんご。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4616s/>

とある継接の欠陥製品

2012年1月6日00時48分発行